

フェルマーの最終定理

JJ1SXA/池

「 $(X^n) + (Y^n) = (Z^n)$ で n が2より大きい自然数の解はない」というのが、「フェルマーの最終定理」と言われるものだ。

17世紀のフランスの法律家フェルマーは、「証明法をみつけた」とだけ本に書き残していた、この「フェルマーの最終定理」にどれほど多くの数学者が挑み、敗れ去ってきたことか、だが、360年後の1994年、米プリンストン大のアンドリュー・ワイルズ教授がようやく証明に成功した、そして、その鍵となったのが、「谷山・志村予想」と呼ばれる楕円曲線に関する理論である、半安定楕円曲線における谷山・志村予想を証明することで、フェルマーの最終定理も証明したようだ。

谷山豊さんと志村五郎さんは、東大数学科で学術雑誌の貸し借りをきっかけに知り合った、谷山さんは31歳でガス自殺を遂げる、当時プリンストン大に移っていた志村さんが、谷山さんの研究を引き継いだ。

数学者の藤原正彦さんによれば、奇妙奇天烈で豪快だった谷山さんの理論を、志村さんが10年くらいかけて美しい姿に仕上げたと言っている、フェルマーの定理の証明より、「谷山・志村予想」の方が、数学への貢献は大きい、との見方さえあるそうだ。

谷山豊さんは、1958年に東京大学助教授に就任。同年5月、理学博士、10月には婚約が決まり、プリンストン高等研究所からの招聘を受けるが、その矢先の11月17日に豊島区池袋の自宅アパートでガス自殺を遂げた。

兄と久賀道郎に宛てた遺書は大学ノート3枚に及び、その冒頭には、「昨日まで、自殺しようという明確な意思があったわけではない。ただ、最近僕がかなり疲れて居、また神経もかなり参っていることに気付いていた人は少なくないと思う。自殺の原因について、明確なことは自分でもよくわからないが、何かある特定の事件乃至事柄の結果ではない。ただ気分的に云えることは、将来に対する自信を失ったということ。僕の自殺が、或る程度の迷惑あるいは打撃となるような人も居るかもしれない。このことが、その将来に暗いかげを落とすことにならないようにと、心から願うほかない。いずれにせよ、これが一種の背信行為であることは否定できないが、今までわがままを通してきたついでに、最後のわがままとして許してほしい。」と記している。

盟友だった志村五郎さんは、谷山さんを次のように評している「谷山はたくさんの間違いを犯す、それもたいていは正しい方向に間違えるという特別な才能に恵まれていた。私はそれがうらやましく、真似してみようとしたが無駄だった。そうしてわかったのは、良い間違いを犯すのは非常に難しいということだった。」、…何やら、わかったようなわからないような評伝だが、たいていは正しい方向に間違るとはすごいことだ。

志村さんは、中国の古典文学に関する研究書など、数学とは関係のない原稿も数多く残している、その一つが「丸山真男という人」と題したエッセーである、戦後の論壇に大きな影響力を持っていた政治学者に対して、歴史認識の誤りや教養の欠如を批判していた、あの丸山真男を批判したことに敬意を表したい、丸山真男に毒され続ける人も結構多い。

2019年5月3日、89歳で亡くなられたが、この天才学者の脳は、どんな構造をしていたのか？また、夭逝した谷山さんの脳は、どんな構造をしていたのか？